



アラスカ国立公園の印象

遠藤 太郎

筆者は一昨年七月八月にかけ約一カ月間水河積帯の植生調査の目的でアラスカ・カナダB・C州の地を訪れた。

アラスカではマッキンレー国立公園、ポータージ氷河、アリエスカ山などで、カナダは七四年と二度目であったが、B・C州のギャルバリディ、アロウエツテ湖を包むゴールデン・アース州立公園などをキャンピングをしながらの調査旅行であった。

今回はその中のマッキンレー国立公園について、印象に残る二、三について述べてみたい。アンカレッジよりアラスカ鉄道でマッキンレー公園駅には八月一日の夕刻に

着。早速ビジター・オリエンテーション・センターにキャンパス手続きや旅行の目的を伝え、駅近くのモリノ・キャンプ・グラウンドでテントを張り、まだ白夜の残る一夜を明かした。

翌二日早朝のワンマンサービスマスで一週間予定の調査の初日を迎えたのであるが幸いなことにバスの運転手(レインジャー本部所属)が若い美しい女性で、アメリカ本国自然保護発生の地モンタナ州の大学生であり、植物研究を兼ねたアルバイトということで、私にとってまことに幸運な出会いでもあった。早朝のため乗客わずか五名も、一層よい機会となったようである。

駅から約二〇キロ地点までアスファルト路になっており、その先一〇キロのワンダー湖の終着点まで舗装なしの道路が続くわけだが、彼女の説明で、舗装することは動植物の生態系に悪影響を与えるので今後もしないという返事がかえってきた。アスファルトの終点地に『Private vehicles restricted beyond this point』という標識が立てられ、傍にレインジャーのチェック・ハウスがあつて二人の男性が制服で勤務していた。ここからマイカーの乗入れに厳しい制限が加えられ、それらの人たかもサービスマス(無料)を利用して、マッキンレーの山々、マルドロウ氷河の壮大な景観

を満喫するというのであった。

この運転手には滞在中いろいろお世話になったが、彼女の運転席の隣りに腰をおろし、私から彼女に専門的な植物関係の質問をすると、あるときは車を徐行させ、あるいは停止して説明してくれるというサービスマス振りに、すっかり感激してしまつた。この日、雲一つない快晴に恵まれ、マッキンレー山を主峰とする四、五千メートルの雪冠の白い輝きや、五四キロに及ぶ水河とその下部にある水河積の最も眺望のよい駅から八〇キロ地点にある *Biggs* に下車

し、マーモットの馳け廻るヒースを中心とした群落の調査を最終の帰りバスまで行うことができた。ここはビジター・センターが建てられてあるが、みやげ品などなく、休息と眺望を欲しいがままにする場所であつて、うまい湧水がふんだんに飲める。

ここへくるまで運転休息が五度ほどあつたが、その折りも彼女は私の差出す花々を英名で解説してくれ、山々の名を指しながら標高メモを手渡し、もしアラスカにゴールドラッシュがなかったら、この素晴らしい自然もアメリカ人から省みられなかったでしょうねとつけ加えてくれたりした。

停車地の清潔な水洗トイレ、ペーパーが十分備えてあるなど、さすがにアメリカの配慮という実感を味わつたものである。紙

屑一つ散っていないことはいままさら言うまでもない。

私のキャンプ地は近くに *Hings Creek* の白い河が流れ、またキャンプ地を包む周辺の森の中を幾条かの散策路がつつましくめぐらされている簡素なところで、アメリカ、カナダ、イギリスなどから集まつたキャンパーも夜九時を過ぎると静かな眠りに入り、喧騒な夜は一日もなく過ぎた。九時すぎから朝までレインジャーによる巡視があり、キャンパーの安全や前日のゴミの処理で環境の保清に随分気を配っている。リス、マーモット、ジェイカがテント付近を馳け、飛び交うキャンプ地。マイカーの乗入れのないキャンプ地。日本の現状とは余りにも馳け離れたことへの羨望が残つた。

八日、最後の日の調査はワンダー湖へ向う。帰路のバス運転手はひげもじやの中年の男性で、彼は動物に詳しく、アラスカイグル、ムース、カリブー、マーモット、灰色熊などのそれぞれの生態や習性を車窓に出現する都度説明してくれた。三千メートルの高地に棲むジェイカ(盗賊カモメ)やダール羊の高地岩上生活のことへの質問に、その数・群数・場所・酷寒期の生活相にまで触れ、答えてくれた。彼が単なる運転手でなく、平素は動物生態の調査官であることも判つて、成程!と肯けた。

山陵の道の両側はヤナギランが群生し、ドウォーフ・バーチの叢生の姿が消えるあたりから緑濃いスプルス（モミ）原始林がせまり、おそらく永久に損われることのない自然に別れを告げつつ明日の旅立ちを想っている私であった。 78・1・3

（日本生熊学会員）

松葉杖の旅から

久万田 敏 夫

いま、私はつまらない事故で、自宅療養中の身です。インド西部のシムラで昆虫調査中に犬に吠えられ、追いかけられて二メートルほどの高さから跳び下りたために、右足カカトの骨を折ってしまったためです。口の悪い友人は「ベンガルドラに追いかけられたのかと思つたよ」と皮肉をいいますが、なんのことはない、一匹の犬のために三カ月もの重傷を負うことになってしまいました。

空港の混雑は日本もインドも同じです。二本足で歩いているときは、この混雑もさほど気にならなかつたのですが、慣れない三本足の歩行ではつい不安を感じてしまいました。インドの空港では、デリーでもカルカッタでもそうでしたが、松葉杖で歩いて行くときとあの人混みの中で、附近の人はさり気なく道をあけてくれるのです。大体インド人はどんなところを歩いていても、実にゆつたりしているのです。ところが羽田空港での松葉杖での歩行は、私には恐怖でした。附近の人は皆、目の色を変えてわれ先にと突進して行き、松葉杖でのんびり歩かれるのは邪魔だといわんばかりです。思わず立ちすくむことが何度もありました。

デリーの病院で発行してくれた添書のおかげで、チェック・イン後はこの空港でも車椅子を用意してくれたため、こういう不安はありませんでしたが、それまでの間、空港待合室に椅子の少ないことも今度の旅行では骨身にこたえました。特に日本の空港では椅子が少ないようです。一般の人でも空いた椅子を見つめるのは大変だろうと思います。私もやむを得ず喫茶店か食堂に入ろうと探してみると、多くの空港では二、三階にこういう施設がありました。

松葉杖で階段を上るのもおつくりなので、大抵の場合、壁にもたれることになりました。鳴物入りで開設された成田国際空港の立派さは、利用された方には先刻ご承知のことと思いますが、あの広びろしたロビーにも坐れる椅子はほんの少ししかありません。まるで老人や身傷者は旅行する必要がないといわんばかりです。デリーやカルカッタの空港でもこの事情は似たものでしたが、私が壁にもたれて立っているとき、誰かしら椅子に案内して坐らせてくれました。デリーで入院中に、私は手紙を受取り日本大使館に行ったことがありました。在外公館への入構はかなり嚴重なチェックを受けます。正門でタクシーを下りて松葉杖で受付へ行くと、インド人の守衛はすぐに電話をかけてタクシーのまま入構して良いかどうか聞いてくれるのでした。構内の建物の中でも、日本人とインド人が話し合っていました。松葉杖の私を見つけてドアを開けてくれたのは、インド人でした。日本人の公館員は全く知らぬ顔で、時には私の前をすり抜けて松葉杖を蹴飛ばされるのではないかと胆を冷すほどでした。

日本ではインド人の評判は一般に良くありません。私も研究者仲間でもインド人はずるく、ずうずうしく用件を申し込んでくるので、交友する際にはよほど注意してかからなければならぬ、というのが定評になっています。それに比して、日本人は世界で最も親切で優しい国民だと、子供の頃から聞かされて来ました。しかし今回インドを旅行し、不自由な体になって受けた感じは、これとは全く逆の印象でした。インド国内で受けたインド人の親切心は、私が外国人だったからだとはとても思えないものでした。心の底からの優しさの表われであつたように思えてなりません。共同研究者であつたカルカッタ大学の人達が見せてくれた時には煩わしいとさえ思えるほどの親切心も、とてもその場限りのものとは考えられません。

昔、日本へ来たことのあるインド人の研究者は、「日本で受けた親切は、いまでも忘れられません。私はそれと同じことを貴方に行っているだけです。インド人の最大的美徳は、日本人と同様に親切心にあるのです」と語ってくれました。路上居住者がまだ大勢いるインド社会の現状と、この親切心がどう結びつくのか、社会学や政治学を専攻していない私には理解できないことですが、私がインドで会った人達は、皆、心から親切な人達であつたことは事実です。

子供の頃に聞かされたことや、インド人が語ってくれたことが事実だとすれば、日

本人の精神構造は変わってしまったのでしょうか。経済の発展と親切心の発露は反比例するのでしょうか。日本人の親切心、優しさの喪失は、戦後急激に強調された経済的・社会的な競争の原理にその原因があるように、私には思われてなりません。生物学上の生存競争と同様に、競争の原理には必然的に弱者切り捨ての思想が含まれています。親切心や優しさは、本来人間の本質に関わるものですが、作用する方向は弱者に対するものでしょう。子供の頃から受験競争の荒波にもまれて来た人達に、親切心や優しさは生まれづらいのではないのでしょうか。弱い者への配慮の無さが空港の設備となつて現われ、空港に群がる人達の態度となつて現われているように私には思われました。

最近私は環境庁の依頼により、北海道の貴重な昆虫類の分布調査をいたしました。種々の生物の分布を調べたうえで、貴重な種類が多く分布する地域は保護し、少ないか全く分布しないところは開発の対象にしようとする発想から出た基礎調査のようです。ここでも競争の原理が働いています。貴重な種類が少ない自然は切り捨ててしまおうというわけです。しかしいま私達に必要なことは、自然状態を保つているところは、貴重な生物が生息しているようにまい

と、できる限り残そうという態度ではないでしょうか。弱者に対する思いやりがここでも必要のように思います。(北大農学部)

「緑と学園」後日譚

石井次郎

本誌第十六号に副会長・八木健三氏が紹介された『緑と学園』問題、のその後の経過を報告します。

結論をさきに申しますと、完璧とはいえないまでも、当世としては満足すべき解決をみたと思います。それで現地視察をはじめ種々ご配慮いただいた会員諸兄へのお礼の意味も兼ねて、十六号記事以降の経過を簡単に述べます。

五十二年九月、下藤野白樺団地町内会高校問題委員会は堂垣内知事宛に『札幌市南区下藤野白樺団地南側隣接地区の自然林保存に関する要望』を道議会に提出しました。これには参考資料の一つとして十六号記事も添付させていただきました。この要望書提出が契機となり、道新をはじめいくつかの新聞が記事として取りあげたため、

従来よりは多くの人びとに知られたりしましたが、半面、真相不詳のまま当事者の幾人かに誹謗があったこと、また、団地住民の真意を理解しないまま『高校設立促進』の署名運動が強行されたことも事実です。

五十二年度は、道教委側と団地住民の意向は対立したまま、なんら解決することなく過ぐるかに見えましたが、冬を迎える頃中川新道教育長と白樺団地高校問題委員との余人を交えない会談が実現したこと、また教育長自身が親しく現地視察を行ったことなどの経過を経て初めて両者の意志の疎通が行なわれ、団地住民が高校建設そのものに反対しているのではないこと、自然林の保存、校地拡大への誠意も認め合い、ようやく妥協点を見出しました。最終案として、野球場、陸上グラウンドなどを一面、教室棟を一面とする二面造成とし(この方が当初案の三面造成より平面を有効に使用できる)、団地との間には幅二〇メートル、ところによつては五〇メートル以上の自然林を残すというものです。

校地のブロック・プランニングが以上のように決着したのも、本会々員・上田陽三北大建築学科助教授が、可能な限り自然を生かすブロック・プランニングを、白樺団地住民のために製作して下さっていたことも、興かって力があつたと信じます。

五十三年の春には道議会に提出していた要望書も撤回したので、五月には立木の伐採も行われました。目下五十五年度開校を目標に高校用の下水道と敷地造成の工事が急ピッチで進行しております。

最後に、自然保護も道理ある科学的な政治が行われない限り、遂行できないことを痛感しました。定鉄沿線についていえば、従来どおり農・林業をしていただけでは食べていけない、従って農・林業従事者は市街化調整区域の枠が外れて、土地が高い値段で取引されることを願うという現実があります。

お役所は『緑と小鳥一杯の南区に』というスローガンを掲げていますが、残念ながらスローガンだけに終わっています。有名な藤の沢の『小鳥の村』も、早急に保護区の枠を拡げなければ小鳥の種類の減少を来すことは明らかです。道理ある政治が行われることを切望する次第です。